『発達障害をもつ子どもと成人、家族のためのADL』正誤表

p.3 表2の入浴	手めぐい → 手ぬぐい
p.8 ↓17	APDL → IADL
p.10 ↓2	青年期(12～24.5歳) → 青年期(12～24, 5歳)
p.10 ↑7	お母さんが食事を準備する生活活動 → お母さんが食事を準備するという生活活動
p.12 ↑5	注意の持続性や遊びの達成感により, 感情・情緒も → 注意の持続性や遊びの達成感, 感情・情緒も
p.14 図13の発達のキーワード〔5カ月〕	お母さんが頼りの信頼りの依存の時期 → お母さんが頼りの依存の時期
p.14 図13の社会・心理〔8カ月〕	眠くなると自分の布団 → 眠くなり自分の布団
p.14 図13のコミュニケーション〔4カ月〕	自ら大人に → 笑いかける
p.15 図13の発達のキーワード〔9カ月〕	お母さんが頼りの信頼りの依存の時期 → 削除
p.15 図13の発達のキーワード〔14カ月〕	自主性が芽生え・いたずら期 → 自主性の芽生え・いたずら期
p.15 図13の睡眠〔14カ月〕	一語を話す(ワンワン・アッタ・ナイ)関係性を理解する → 「コミュニケーション」の欄に移動
p.17 図13の社会・心理〔60カ月〕	集団, 家族のなかでの役割を責任をもってできる → 集団, 家族のなかでの役割に責任をもってできる
p.18 ↑7	活動は, 第一段階の → 活動については, 第一段階の
p.19 ↑12	聞いた後のこちらが話はじめる → 聞いた後にこちらが話はじめる
p.20 ↑10	次に子どもは養育者に這い這いで → 次に子どもが養育者に這い這いで
p.25 ↓12	子どもの自立を応援することが重要である. → 子どもの自立を応援することである.
p.25 ↑6	子どもの発達を支え促進する存在しとてとらえられてきた. → 子どもの発達を支え促進する存在としてとらえられてきた.
p.26 ↑9	適合の良さ／悪さからの適合(または, 不適合)では必ずしもなく, → 適合の良さ／悪さから(不適合)だけではなく,
p.28 ↓5	条件などは環境からの働きかけで → 条件など環境からの働きかけで
p.29 ↓11	「どうそればいいの」 → 「どうすればいいの」
p.30 ↓14	子どもは離乳食を食べている時に → 子どもが離乳食を食べている時に
p.32 図25-②の排泄〔養育者の姿〕	「シーシーしようね」促しながら → 「シーシーしようね」と促しながら
p.33 図25-③の更衣〔交互のコミュニケーション〕	子どもができることを増やし, できら喜んであげる → 子どもができることを増やし, できたら喜んであげる
p.34 図25-④の清潔〔交互のコミュニケーション〕	自分で洗面台で洗えるよな工夫を行う. → 自分で洗面台で洗えるような工夫を行う.
p.40 ↓3	育む段階を迎えことになる. → 育む段階を迎えることになる.
p.47 ↑8	腹臥位でのバランス反応の発達がこの時期に → 腹臥位でのバランス反応がこの時期に
p.53 ↓9	③便座の移動と座位保持 → ③便座への移動と座位保持
p.53 ↑7	体幹の回旋運動が必要される. → 体幹の回旋運動が必要とされる.
p.58 ↓9	最重度の知的障害が食事動作を学習する → 最重度の知的障害をもつ子どもが食事動作を学習する
p.59 ↑7	なんらか心身機能の障害の影響で → なんらかの心身機能の障害の影響で
p.71 ↓6	子ども自身が特にパンツやズボンの脱着の行いにくさは生じる. → 子ども自身に特にパンツやズボンの脱着の行いにくさが生じる.
p.71 ↑11, 9	幼時期 → 幼児期
p.75 ↓9	ROMex → ROMex.
p.77 ↑7	自閉症性障害 → 自閉性障害
p.79 ↑11	カタチを援助者が理解してから, 何故拒否するかを → カタチを援助者が理解し, 何故拒否するかを
p.81 図49の社会的・文化的技能の段階	(脱ぎっばなしにしないで, → (脱ぎっぱなしにしないで,
p.89 ↑1	活用しているかがかわるものである → 活用しているかがわかるものである
p.91 図7の指導2	1. 座位から膝たちの施設指導 → 1. 座位から膝立ちの姿勢指導
p.93 ↑3	子どもが環境と人とどのように → 子どもが環境や人とどのように

p.97 図12の左側説明文	③作業遂行課題を活動制限と参加制約，環境因子と個人，心身機能，身体構造障害から解釈し， → ③作業遂行課題を活動制限と参加制約，因子，心身機能，身体構造障害から解釈し，
	個別支援会議，または他職種との話し合い後，作業療法の目標が決定（図C） → 個別支援会議，または他職種との話し合い後，作業療法の目標が決定される（図C）
p.99 図13のⅠ-2. 社会的情報	生育歴，発達歴，（簡単で結構です．経済状況，家族歴などは省略） → 生育歴，発育歴
p.99 図13のⅡ-3. 評価のまとめ	それぞれの結果を身心機能・身体構造， → それぞれの結果を心身機能・身体構造，
	肯定的，否定的に整理する． → 肯定的，否定的側面に整理する．
	（両育目標， → （療育目標，
p.99 図13のⅡ-6. 効果または実施した作業療法	再度ICFの図に基づいた結果を記載する → 再度ICFに基づいた結果を記載する
p.100 図14	環境的因子 → 環境因子
	個人的因子 → 個人因子
p.100 ↑4	子どもの交互作用を手段・方法として活用することで，第1章で強調した交互作用のなかに子どもが変化するヒントがあり， → 子どもの交互作用を手段・方法として活用し（第1章で強調した交互作用のなかに子どもが変化するヒントがある），
p.102 ↓14	身心機能・身体構造障害 → 心身機能・身体構造障害
p.103 図16	身心機能・身体構造障害 → 心身機能・身体構造障害
	筋緊張姿勢バターン → 筋緊張姿勢パターン
p.105 ↓3	小児科学，整形外科，運動学， → 小児科学，整形外科学，運動学，
p.114 ↑8	交換し合えるならばより良いと考える． → 交換し合えると良いと考える．
p.115 ↓10	（オペラト行動） → （オペラント行動）
p.116 ↑1	楽しくてテレビの画面からキャラクターが飛び出し， → テレビの画面からキャラクターが飛び出してくるかと楽しくなり，
p.120 ↑4	このように移動が自力でできる子どもは，生活のなかの経験している姿勢を → このように移動が自力でできる子どもには，生活のなかで経験している姿勢を
p.126 ↑4	口や手で探索活動を行うという機能があれば，この道具を使用して1つの皿からご飯をすくって食べることができるようになる． → 口や手で探索活動を行うことができるレベルである．
p.127 ↑10	基本的ADLの発達は子どもの立位化と → 基本的ADLは子どもの立位化と
p.127 ↑8	つかまり立ちでの遊びが基本となる． → つかまり立ちでの遊びができることが基本となる．
p.128 ↑4	ズボンの操作がしやくなる → ズボンの操作がしやすくなる
p.131 図51	図51 行動の分析：オペラント行動とリスポデント行動 → 図51 行動の分析：オペラント行動とリスポンデント行動
p.131 ↓8	②フラッシュが光る→目をとじる」であり， → ②フラッシュが光る→目をとじる」である．
p.132 ↓7	その形態は変化していくものであり， → 変化していくものであり，
p.133 ↓16	関節制限に至る． → 関節可動域制限に至る．
p.133 ↑7	複雑な動作を連鎖させることが苦手， → 複雑な動作を連鎖させることが苦手であるため，姿勢変換を減らして簡単な動作から学習させる，
p.134 ↑9	立位時に比べて支持面が広い， → 立位時に比べて支持面が広く，
p.136 ↑4	それらの動作を応用行動分析理論の促進を選択して， → 次に応用行動分析理論の促進を選択して，
p.140 ↑6	中等度の知的障害をもつ子どもは， → 中等度の知的障害をもつ子どもには，
p.140 ↑2	座った上体で一側臀部に → 座った状態で一側臀部に